

磯貝治良の中期作品における在日朝鮮人像の形成

—少年時代の「朝鮮体験」を生き直す—

浮 葉 正 親

要 旨

本稿では、まず磯貝の初期（1950年代末から70年代中盤）の文学活動を紹介しながら、実存主義文学や日本の戦後文学に強い影響を受けた作家が在日朝鮮人文学に出会うまでの過程を跡づける。次に、「在日朝鮮人作家を読む会」（以下、「読む会」）を創設し、在日朝鮮人文学に傾倒していく中期（1970年代末から90年代）の作品に注目する。具体的には、「時を跨いで」（1979）、「梁のゆくえ」（1984）、「漁港の町にて」（1996）、「青の季節」（1998）という4つの小説を取りあげ、在日朝鮮人の登場人物の描き方を抜き出してみる。

4作品すべてに登場する2人の朝鮮人の少年には、磯貝の少年時代の「朝鮮体験」が投影されている。「読む会」を創設して本格的に在日朝鮮人文学に向き合い、在日朝鮮人の社会活動にも積極的に関わろうとしていた磯貝は、少年時代の「朝鮮体験」を小説化して「生き直す」ことによって、自身の表現活動の基盤を更新したのではないかと考えられる。

キーワード

在日朝鮮人文学、〈在日〉文学、磯貝治良、在日朝鮮人作家を読む会

目 次

1. はじめに
2. 初期の文学活動と在日朝鮮人文学との出会い
3. 中期の4作品に登場する在日朝鮮人たち
4. 「朝鮮体験」を生き直す

1. はじめに

「在日朝鮮人作家を読む会」に参加して約10年になる。この会は1977年12月に名古屋で結成され、これまで420回の月例会を重ねてきた（2013年12月現在）。小説、詩、評論など、在日朝鮮人が書いた作品を読み、その感想を語り合うというスタイルで35年以上も活動を続けてきた。参加者10人に満たない小さな会ではあるが、在日朝鮮人と日本人が文学を通して出会う貴重な場として、それなりの役割を果たしてきた。また、メンバーの作品を発表する『架橋』という文芸誌もこれまでに32号刊行している。参加費はその日の会場費を頭割りして払い、『架橋』の印刷費は執筆者がページ数に応じて掲載負担金を出している。したがって、入会金や年会費もなく、「来る者は拒まず、去る者も追わない」のがこの会のモットーである。

主宰の磯貝治良（1937年生まれ）は、在日朝鮮人文学に関する最初の評論集である『始源の光』（創樹社・1979）をはじめ、『戦後日本文学の中の朝鮮韓国』（大和書房・1992）や『〈在日〉文学論』（新幹社・2004）を著し、また全18巻からなる『〈在日〉文学全集』（勉誠出版・2006）を編集している。その一方、在日朝鮮人文学に関する評論だけでなく、『イルボネ チャンビョク』（風琳堂・1994）、『在日疾風純情伝』（風琳堂・1996）、『夢のゆくえ』（影書房・2007）という3冊の小説集を発表している。本人の弁によれば「売れない物書き」である。さらに、外国人登録証指紋押捺反対運動に参加し、PKO 自衛隊派遣違憲訴訟の原告になり、南北の鉄道連結と北の緑化事業の推進を目的にする NPO 法人「三千里鐵道」の理事を務めるなど、社会運動にも積極的に関わってきた。

筆者は、科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究、課題番号：21652035）を得て、磯貝の50年以上にわたる文学活動と在日朝鮮作家を読む会（以下、「読む会」と略す）の活動の全体像を明らかにしたことがある（『社会参加としての在日朝鮮人文学——磯貝治良とその文学サークルの活動を通して』名古屋大学・2012）。

本稿では、まず磯貝の初期（1950年代末から70年代中盤）の文学活動を紹介しながら、実存主義文学や日本の戦後文学に強い影響を受けた作家が

在日朝鮮人文学に出会うまでの過程を跡づける。次に、「読む会」を創設し、在日朝鮮人文学に傾倒していく中期（1970年代末から90年代）⁽¹⁾の作品に注目する。具体的には、「時を跨いで」（1978）、「梁のゆくえ」（1984）、「漁港の町にて」（1996）、「青の季節」（1998）という4つの小説を取りあげ、在日朝鮮人の登場人物の描き方を抜き出してみる。そして、小説に登場する2人の朝鮮人の少年には、磯貝の少年時代の「朝鮮体験」が投影されており、それを小説化することで自身の表現活動の基盤を更新したのではないかと考えられることを指摘したい。

2. 初期の文学活動と在日朝鮮人文学との出会い

磯貝治良は、1937年、愛知県半田市の亀崎という漁港のある町に生まれる。1956年、東邦高校から愛知大学法経学部に進学している。大学入学後、ドストエフスキーやカフカ、またカミュやサルトル、A・マルローなどの「実存文学」に夢中になり、大学2年の夏、仲間と同人誌『追舟』を創刊し「甲蟲と女」などの小説を発表する。それをきっかけに在学中に木全圓壽が主宰する『北斗』の同人となり、1966年に退会するまで、「かくて驟馬ら天に登る」（1960年10月号）をはじめ13篇の小説とドストエフスキーの「悪霊」論などを発表する。この時期、愛知大学教授だった文芸評論家で翻訳家としても有名な丸山静の家を頻繁に訪れていたという。丸山邸に通う若者たちと1961年に「現代参加の会」を結成する。会名は、60年安保の余韻なかで時代のアクチュアルな状況に参加しようというもので、磯貝の発案による。アンガジュマン（仏語：engagement、「政治参加」「社会参加」と訳される）の思想が念頭にあったという。その会はメンバーの意見の対立で瓦解するが、磯貝はその活動を「新日本文学名古屋読書会」につなげたという。

1966年は、磯貝の文学活動にとって大きな転機だったようである。4月に江夏美好が主宰する『東海文学』の同人となり、8月に新日本文学会に入会、秋には「新日本文学名古屋読書会」を発足させている。『東海文学』には、1975年までの間に、「迷彩の陰画」（1968年2月号）、「八箇孕石にて」

(1968年9月号)、「流民伝」(1970年3月号、『夢のゆくえ』所収)など数多くの小説を発表しており、「わたしの文学をめぐる旅の旅程でも最も旺盛に小説を書いた時期だった」と回想している(磯貝2010:66)。「新日本文学名古屋読書会」は、60年代から70年代にかけての時代状況と併走する、国内外のアクチュアルな本を毎月テキストとする読書会で、街頭行動にもよく出たという。1976年1月、「新日本文学名古屋読書会」を離れ、「青年の環を読む会」を結成、野間宏の長編『青年の環』を毎月1回、1年半かけて読んだという。月1回の読書会というスタイルは、後の在日朝鮮人作家を読む会でも同様である。

新日本文学会は、磯貝の文学活動の拠点になった団体である。花田清輝、長谷川四郎、野間宏、埴谷雄高、安部公房、いいだもも、小林勝、大西巨人など、会にゆかりのある作家たちの作品を読むだけでなく、『新日本文学』は「極端に言えば広告欄も含めて毎号、すべてを読んだ」(同前:70)という。『新日本文学』には、「街」(1970年6月号)、「最後の電話」(1972年7月号)、「きちげあそび」(1977年2月号)、短編連作「夢のゆくえ」(1980年2月号～1981年8月号)など10篇の小説を掲載。ルポルタージュも「死んだ故郷・衣浦湾」(1973年10月号)をはじめ8篇、評論は在日朝鮮人文学について最初の評論である「始源の光——金史良の作品をたどって」(1979年8・9月号)をはじめ14篇を発表しており、そのうち8篇が在日朝鮮人文学に関するものである。

磯貝は、在日朝鮮人文学との出会いを次のように語っている。(磯貝2010:76)

本腰を入れて在日朝鮮人文学を読みはじめたのは「読む会」を始めると決めてからだだが、それ以前からポツリポツリと読んでいた。読書ノートを見ると、1970年代に入ってからだが、金達寿、呉林俊、金石範の作品のほか安宇植『金史良—その抵抗の生涯』などを読んでいる。在日文学ではないが時節柄、金芝河もよく読んだ。とくに金石範は当時、読むことができた小説、評論のほとんどを読んだ。なかでも『鴉の死』

は立てつづけに三回、読んでいる。それまでドストエフスキーやカフカ、サルトルやカミュなど外国文学と日本の戦後文学を読みふけてきて、急に在日朝鮮人文学にシフトした直接のキッカケは『鴉の死』に呑み込まれたことだったと思っていた。

また、別の文章では、戦後文学を通して在日朝鮮人文学に出会ったと語っている。(磯貝2004:103)

私の“文学人生”は一九五〇年代の後半、二十歳になるかならないかの頃に同人雑誌を発行することからはじまったのだが、その頃はドストエフスキー、サルトル、カミュ、カフカ、A. マルロー、サン・テグジュペリ、ドス・パソスといった欧米ものにかぶれていて、日本文学は“文庫本一日一冊読書”といった日課を義務的に自分に課して一年ほどつづけ、あとはほとんど関心を向けなかった。(中略)

日本文学を本腰を入れて読みはじめたのは六〇年代にはいつてからで、第一次戦後派文学と、それを継承する作家たちだった。戦後文学を読みつぐ一方、私なりのあらたな“朝鮮体験”も経て、そんななかで出会ったのが第一文学世代の作品だった。戦後文学とのかかわりのなかで在日朝鮮人文学に出会うというのは、いかにも邪道だが、考えてみれば日本と朝鮮の切り離せない歴史の延長にある日本の戦後を捉えかえすとき、朝鮮がまるごと視野にはいつてきて在日朝鮮人文学に出会うのは当然な気がする。

ここでも、日本の戦後を考えることが在日朝鮮人文学との出会いにつながるのだという磯貝の持論が展開されている。上の「あらたな“朝鮮体験”」は、1980年代から90年代にかけて指紋押捺反対闘争に積極的に関わったことだと思われるが、磯貝が自らの「朝鮮体験」の原点として言及するのは、少年時代の同年代の朝鮮人との交友である。次に、磯貝がその「朝鮮体験」を作品の中でどのように描いているのかを具体的に見ていこう。

3. 中期の4作品に登場する在日朝鮮人たち

磯貝は回想録「文学ときどき人生——文学の旅・素描」『架橋』29 (2010) で、自らの「朝鮮体験」の原点として、近所に住んでいた同級生のYや1学年下のSという朝鮮人の友人との交友をあげる。YやSとの交友は、「時を跨いで」『幻野』16 (1979)、「梁のゆくえ」『架橋』5 (1984)、「漁港の町にて」『架橋』16 (1996)、「青の季節」『架橋』18 (1998) に繰り返し登場する。1970年代末から90年代にかけて、これらの小説群を書くことで、磯貝は自らの「朝鮮体験」を掘り下げ、作品の核として意識化していったようである⁽²⁾。磯貝は、「少年期から現在までの〈在日〉との付き合いの織り重ね」、「体験と活動の織り重ねが、根っこが生える土壌みたいなものになって、在日朝鮮人文学との出会いと継続につながっている」と述べている。(磯貝2010: 76-77)

それでは、上記の4作品でYやSはどのように描かれているのだろうか。作品に即して具体的に紹介していく。

(1) 「時を跨いで」(1979)

朝鮮問題研究会のメンバーである作家の花村成夫は、朝鮮民主主義人民共和国への訪問を打診される。花村がこの研究会のメンバーとなったのは、「彼個人が過去の節々に出会った朝鮮の友人との体験を呼びもどされたためであった」。そして、その誘いに「もしかしたら申浩徹(シン・ホチョル)と再会の機会がおとずれるかもしれない」という一縷の望みをかける。

申浩徹は花村が生まれた漁港の町Kの小学校で1学年下であったが、幼いころはほとんど付き合いがなく、話をするようになったのは申が同じ高校に入学してからである。文芸サークルで文学を熱く語り合い、議論を戦わしているとき、申の兄がN市のO事件(筆者注: 名古屋市の大須事件)で警官隊にピストルで頭を撃たれて死んだことを知る。花村が高校を卒業する直前に文芸サークルで雑誌を発行することになり、申は韓国併合から朝鮮の解放に至るまでの植民地統治の歴史をつづった長大な論文を投稿するが、編集部にはボツにされる。その後しばらく疎遠になっていたが、二人の共通の友人である洪永植の取りなしで再び親交を深める。申が花村の通

う私立大学に入学してからは下宿に同居し、申が大学を中退して家族とともに共和国に帰国するまで、「学友たちが「同性愛」みたいと評する一年ほどの生活が二人のあいだにはあった」。

一方、花村は韓国の民主化運動にも関わり、集会でKの小学校で2学年下だった姜省子（カン・ソンジャ）と再会する。花村は小学生のころ、授業をさぼって映画を見ていたことを教師に告げ口されたと勘違いし、姜の頬を殴ったことがある。姜は朝鮮高校への進学を希望していたが、父親の反対で私立の商業高校に通った。卒業後は同胞の経営する製菓会社に就職し、同僚の日本人青年と恋愛結婚したが、子どもが生まれるとすぐに離婚し、現在は娘と二人で暮らしている。二十数年ぶりに再会した花村に姜は「あのとき」のこと、つまり花村が姜の頬を殴ったことを憶えているかどうかと問いたす。花村が憶えていると答えると、姜は「それならいいんです。あのときのことを忘れてさえいなければ」と言う。花村はなぜ姜が韓国の民主化運動に参加しているのか知りたかったが、二十数年前の出来事がわだかまりとなって訊ねることができなかった。

故郷の町Kにはもう一人、ヨシダカツトシという朝鮮人の同級生がいた。花村とヨシダは中学3年間同じクラスであった。ヨシダは小学生のころから家で飼っている豚の餌を集めるために働き、学校も休みがちであった。軍隊上がりの数学教師はヨシダを執拗にいじめた。その教師が数人の少年たち（実は卒業生）に襲われる事件があり、級友は皆ヨシダが犯人だと信じて疑わなかった。「花村もまた、そうした級友の一人であった」。ヨシダは中学を卒業するとそのまま家業である豚の飼育を手伝っていた。中学卒業後、花村がヨシダと再会したのは、申が帰国してから最初の夏休みだった。「ヨシダ君の家族はく^ゝにへ帰らないの」（傍点：原著）と花村が訊ねると、ヨシダは少し憮然とした表情で、「浩徹の家族はいいよ。息子があんなふうに、日本で英雄的な死にかたをしたからな。北へ帰ったら歓迎されるさ。だけど……おれの一家はちがう。北へ帰っても生活が保証されるかどうかはわからん。もちろん食うには困らんだろうが、不安はふっきれんのだ。かといって、南に帰るわけにもいかん」と言う。そう言った後、

ヨシダの上瞼がめくれたように吊り上がっているのは、細い目を大きく見せるための手術のせいだと打ち明けた。「おやじは俺の顔も日本人に帰化させようとしたんだ。就職も結婚もひっくるめて、そうしなきゃ朝鮮人は生きにくいからな。だけど、おやじのもくろみは無駄だったよ」と、思いのたけを吐き出すように話し続けた。それから数年後、ヨシダが日本人女性と結婚したことを噂で知り、結婚後1年も経たないうちに離婚したこともまた中学時代の友人から聞いた。そして、姜と再会したとき、その4年前に彼が心臓の病気で死んだということを彼女の口から知らされる。ヨシダの本名が崔承五（チェ・スンオ）であったこともそのときに知った。

(2)「梁のゆくえ」(1984)

梁星求（ヤン・ソング）と名乗る男がわたしの家を訪ねて来た。その風貌は20年前に死んだはずのヨシダカトシに似ている。ヨシダは泥酔して港の埠頭から転落して溺死したと聞いていた。「辻褄の合わない不可解さであったが、たがいに手を取りあってかれを部屋へ招き入れたとき、わたしになつかしさの感情が湧いてきた」。妻と息子を呼んで紹介し、濁り酒を飲みながら話をする。梁は国（朝鮮）から20年ぶりに来たという。「おれが国へ帰ったのは、二十二歳のときだったかな。日本の女と結婚して、三年ほどあとに離婚した年の冬だったから」と説明する。彼が国へ帰った時というのが、人づてに聞いた、ヨシダが死んだ時である。

「お国ではどんな仕事を？」という妻の問いに、梁は平壤の国立図書館で働いており、それ相応の地位を与えられ、幸せに暮らしているという。しかし、それはわたしが知る申聖吉（シン・ソングル）の消息であった。申聖吉もまたKの町に住んでいて、梁とわたしの友人であった。申は1学年下であったが、梁やわたしとは対照的に成績抜群で品行実直な存在だった。中学卒業後、家業の養豚業を継いだ梁や製材工場に勤めたわたしと違い、その半島に一つしかなかった県立高校へ進学し、名古屋の国立大学に進んだ。大学に入って間もなく申は家族と一緒に祖国帰還船で朝鮮民主主義人民共和国へ帰った。

梁と酒を酌み交わしながら、梁ことヨシダや申と過ごした日々を思い出

す。ヨシダと仲良くなったきっかけはボクシングの対決をしたことだった。そのとき審判をしたのが申だった。ヨシダの家を訪ねたとき、隣の申の家から祖母の身勢打鈴（シンセタリヨン）が聞こえた。勤めた製材工場を辞め、ヨシダと一緒にダルマー家の若い衆となり、肩で風を切って町を闊歩したあげく少年院送りになった。少年院を出る日、迎えに来てくれたのが申だった。申が大学に入学して間もなく、ヨシダは「日本人の女と結婚することになった」と告げた。その話を決めたのはヨシダの父親であり、その結婚によってヨシダを少しでも日本人に近づけたいのだという。上瞼の傷も父親が金を出して整形手術をした痕だという。「だけどな、おやじが好きこのんでおれを日本人にしようとしていると思うか？ それはちがうぞ。腹わたを煮えくりかえらせて。そうしてきたんだ。そうでもしなければ、息子が無事に生きられないと思ひこんでのことさ。おれのおやじのことが、ミツちゃん（筆者注：わたし）、あんたに、わかるか。日本といのは、おれたちには、そういうところだ」と言って、ヨシダは泣いた。その声は今でもわたしの中で響いているが、「それでもおれは、ヨシダの涙をおれのなかに感じるができなかった」。

翌朝、梁と一緒にKの町を訪ねた。名古屋へ戻る電車の車窓に映る梁の影は「消されてたまるか、消されてたまるもんか、と渾身の力をこめて窓ガラスにとどまっている」。名古屋駅のホームに降り、梁は振り向きもせず改札口を出て歩いていく。「おれは梁のゆくえを追う…… 鋭い衝迫がわたしのなかに起こったのは、梁の姿が消えた、その瞬間からだった」。

（3）「漁港の町にて」（1996）

敗戦から間もないころ、小学生の一郎は上級生の命令でヨシダカットシと「決闘」をさせられる。それから一郎とヨシダは放課後一緒に遊ぶようになった。一郎とヨシダは他の級友たち4人と一緒に授業をさぼって映画館に行く。しかし、その映画「鞍馬天狗」が終わると、担任の女性教師と教頭がそこにいた。校長室に呼び出された6人はまるで警察のような尋問を受ける。「首謀者は誰か」「教室を抜け出して映画を観に行くのは何回目か」という問いに沈黙を守り続ける6人に、校長は日本地図の佐渡島を指

さし、「佐渡島には、悪いことをして流された囚人がたくさんいる。校長先生は警察に頼んで、きみたちを佐渡島の監獄に送ってもらうことにする」と脅して家に帰す。心配する一郎にヨシダは、「きっと脅しだよ、ハッタリ。家へ帰っても黙っとったらわからん。ケンチャナ、ケンチャナ」と、一郎には何のことか分からない言葉を付け加えた。

小学校最後の年の秋、一郎は「幼い夢の最後のそれから醒めたように」図書室に通い出す。ヨシダたちとの交友は途絶えてしまったが、図書室で申聖浩（シン・ソンホ）と接触を持つことになる。シンは「記号みたいなものが並んでいる」奇妙な本を「口の中で炒り豆でも噛むような音を出しながら」読んでいた。「変な字だなん。よその国の文字だからかなん」と言う一郎に、シンは「これはよそのくにの字とはちがう。わしのくにの文字」（傍点：原著）だと軽蔑したように言い返した。ハングルと呼ばれる文字をめぐるシンとのやり取りがあって以来、一郎は奇妙な強迫観念にとらわれるようになった。「あの不思議な文字の謎を解かなくては、せっかく読書の魅力と出会ってこれまでとは違う世界へ脱皮しようとしている自分が、なにか嘘ごとのように思われてならない。違う自分になるためには、あのシンの文字の謎を解かなくてはならない」。

卒業式の日、ヨシダに「くにの字を勉強するのなん？ シンみたいに」（傍点：原著）と問いかけると、ヨシダは「わしはシンとは違う」と言って不快そうな表情を浮かべた。「いっくんに話しても無駄なことだと思うけど」と少しためらいながらも、シンの叔父が日本に連れて来られて中島飛行機で働かされ、アメリカ軍の爆撃で死んでしまったこと、シンの父は日本もアメリカも恨んでいること、そしてシンの家は「くに」に帰るつもりだということを教えてくれた。ヨシダの話を聞いて、敗戦の少し前、中島飛行機で働かされていた朝鮮人48人が死んだことを思い出した。前にシンの家に宿題を受け取りにいったときに聞いた、老婆の異様な嘆きの声がヨシダに聞かされた話と関係がありそうなことに気づいた。「それはわしの宿題だなん……」。「ヨシダカットシとシンソンホの謎を解くことが、中学生になってからの自分の宿題であるように」、一郎には思えた。「ヨシダ

とシンの謎を解かなければ、これまでとは違う自分に脱皮できない」と一郎は考えたのである。

(4)「青の季節」(1998)

中学に入学した一郎は、念願の野球部入りを保留した。入学後間もなく、3年生の野球部員である百合野に呼び出され、「小学校ではエースかしらんが、中学じゃ通らん。先輩をうやまわなだちかんぞ」(傍点：原著)とからまれた。百合野は一郎がボクシングジムに通う高校生「サーヤン」の弟であることを知っており、数日後、何事もなかったかのように野球部への入部を勧誘したからである。一方、ヨシダカットシはボクシングジムに通い始めた。ヨシダはジムに行くため、放課後は一目散に家に帰って豚の世話をしなければならないので、一緒に過ごす時間はなくなった。鬱屈をかかえて暇をもてあます一郎は、同じようにクラブ活動からはぐれてしまった仲間たちと時間をつぶすようになった。恋心を寄せる杉野聖子に対する想いも出口が見つからないまま、一郎を虚無的にした。1年前は知の世界へ誘い込まれるように物語を読み耽ったが、そういう意欲も沸かず、無為な夢想の虜になった。一郎の心を慰撫したのは、乞食のコジマはん、列車が通りかかると「あんちゃんぼっぼ」と叫びながら追いかける少年、軍服を着て子どもにも敬礼を繰り返すモーさ、赤い襦袢を翻して裸足で町の中を失踪する「はん」という、漁港の町の畸人たちであった。

2年生になり野球部に入部した一郎は練習に打ち込むが、数学教師で野球部顧問の近藤(アゴ)に事あるごとに反発する。3年生になり担任となった国語教師の久米は、一郎の作文をほめ、「将来、小説家をめざすとええなん」と言ってくれた。七夕の翌日、国語の授業の冒頭で久米は、名古屋で起こった事件について話した。前日、名古屋の大須球場で1万人を超える人が集まって政治集会が開かれた。集会に集まった人たちがデモに出発しようとしたとき、突然、警官隊が朝鮮人の隊列に向かってピストルを発砲した。警官は威嚇射撃だったと弁解しているが、一発が高校生の頭に当たった。「その高校生は申君だ。申君はこの中学の卒業生だから、みんなの先輩だ」という久米の言葉を聞き、死んだのがシンの兄であることを一

郎は直感した。1学年下のシンは小学校を卒業して隣町の中学校に進学したので、しばらく顔を合わせていない。「ヨシダカットシに会わなくては……」とヨシダのクラスに駆けつけたが、ヨシダは欠席していた。6日後に登校してきたヨシダに「シンの兄貴が死んだのか」と問い質すと、「死んだ？ ヒョン（兄）は殺されたんだ」と邪険に答え、いきなりシュツ、シュツとシャドーボクシングを始めた。一郎に向けてパンチを放ったわけではなかったが、ヨシダの右ストレートは一郎の鼻先を掠めた。

4. 「朝鮮体験」を生き直す

以上、「時を跨いで」（1979）、「梁のゆくえ」（1984）、「漁港の町にて」（1996）、「青の季節」（1998）の順で、作品の登場人物、語り手と在日朝鮮人の友人との交友を中心に抜き出してみた。4作品の主な登場人物は次の通りである。

「時を跨いで」では、花村成夫が語り手であり、申浩徹、姜省子、ヨシダカットシ、という3人の朝鮮人の友人が登場する。「梁のゆくえ」では、わたしが語り手であり、梁星求（ヤン・ソング）と名乗るヨシダカットシが北に帰国した申聖吉（シン・ソングル）の人生を自分のものとして語る。連作となっている「漁港の町にて」と「青の季節」では、一郎が語り手であり、同学年のヨシダカットシと1学年下の申聖浩が登場する。

「時を跨いで」に登場する姜省子は、語り手である花村の朝鮮韓国に向き合う姿勢を問い質す存在として登場するが、以後の3作品には登場しない。4作品すべてに登場するのは、ヨシダカットシ／梁星求という名前の人物と、申浩徹／申聖吉／申聖浩という名前の人物である。両者の人物設定は、4作品を通してほぼ同一である。

作品の舞台になっている「漁港のある町」Kは半田市亀崎であり、磯貝が生まれ育った町である。その町に2軒の朝鮮人の家があり、同年代の2人の少年がいた。磯貝は先の回想録で、次のように述べている。（磯貝2010：77-78）

同級生のYのほうは小学校から中学校まで同じ学校に通い、思い出のいくつかを共有した。高校は彼は半田の学校、わたしは半田の別の学校の入試に失敗して名古屋の学校に通った。それで一時、付き合いがとだえたが、彼は半田の学校を中退して名古屋の高校に換わる。わたしとは別の学校だったが、2人はなぜか放課後に会って付き合いが復活する。付き合いといっても、彼とわたしの場合は、ツッパリ高校生のたむろするお好み焼き屋に行ったり、どこかの祭りをひやかしに出かけたりすることが多かった。わたしが大学へ通い、Yが家の仕事を手伝うようになると、彼が町の魚屋や八百屋で豚の餌を集めているとき偶然、顔を合わせて話をする以外は疎遠になった。

もう1軒のほうのSはわたしより1年年下だった。彼とは大学に入るまでは顔を知るくらいで言葉を交わすこともなかった。親しくなったのは、彼がわたしと同じ大学に入ってから。通学の汽車のなかで話したりするうち、家を訪ねてくるようになる。同人雑誌『追舟』を出した頃だ。サルトルの『自由への道』や野間宏の『暗い絵』を読みあって感想を語り合ううちに、彼を『追舟』に誘ったりした。しかし、それは実現しなかった。Sが一家と共に1959年12月14日出航の帰国船第一便で朝鮮民主主義人民共和国へ帰ったからだ。わたしが何も知らずに同人雑誌に誘った頃、一家は帰国の準備をしていたのだ。じつは彼は、1952年7月7日に名古屋で起きた「大須事件」のときに警官隊による狙撃の犠牲になった申聖浩さんの弟だった。

Yのほうは帰国することなく、30歳をすこし過ぎた頃、肝臓癌だったかで亡くなった。Sが帰国して間もない頃、Yは言った。「申の家族は国へ帰っても大丈夫だろう。ヒョン（兄）が日本で英雄的な死に方をしたから、生活も保障されるだろう。でも、うちの一家はそうじゃない」。

帰国して1年ほどたってSから、ピョンヤンの図書館に勤めているという手紙が、Yの一家に届いた。その後のSの消息は知らない。

磯貝によれば、Yについては民族名を知らず、日本名のヨシダカツシ

をそのまま登場人物の名前として使い、Sについては大須事件で亡くなった兄の名前を借用しているという。そして、実際には小説の中で描いたような濃密な関係ではなかったそうである。つまり、実在の名前や設定を借りて、虚構を創り出しているというのである。

磯貝は1990年に発表した評論「わたしの創作入門」で、「小説を書くとは、時々刻々の生き直しの行為だ」と述べ、「小説をつくることによって、もの・こと（事物）・ひと（他者）・社会（時代状況）をもう一度存在しなおさせようとしています。見かけや固定観念によって仮死状態にあるもの・こと・ひと・社会をよみがえらせる、と言いかえてもよいでしょう」と述べている（引用は、在日朝鮮人作家を読む会のブログから）。

つまり、「時を跨いで」（1979）から「梁のゆくえ」（1984）を経て「漁港の町にて」（1996）と「青の季節」（1998）に至る4作品は、磯貝の少年時代の「朝鮮体験」を「生き直した」ものである。最初の「時を跨いで」は、磯貝が「転機となった作品」と位置づけるものである。同人誌『幻野』への掲載は1979年1月であるが、磯貝が所有する「執筆・発言・読書帳」によれば、1977年2月に「灰色の時から（仮題）」というタイトルで執筆されたものである。同年12月に磯貝が「読む会」を創設していることを想起すれば、磯貝は「時を跨いで」を書くことで在日朝鮮人と向き合う自身の姿勢を問い直そうとしていたのではないかと想像できる。

「時を跨いで」には、南北分断と在日朝鮮人社会との緊張関係が描かれ、その問題に関わる語り手に過去の加害の記憶を呼び起こす姜省子という人物を登場させている点、朝鮮韓国問題と真摯に向き合おうとする磯貝の気負いを感じる。次に発表した「梁のゆくえ」は、梁／ヨシダ（Y）とシン（S）を一人の人物（あるいは影）に重ねるという大胆な手法で、語り手から「おれは梁のゆくえを追う」（在日朝鮮人の姿を追い続ける、という意味にも読み取れる）という強烈な独白を引き出している。「時を跨いで」と「梁のゆくえ」の語り手が作家と同年代であるのに対し、「漁港の町にて」では小学生、「青の季節」は中学生が語り手となり、ヨシダカットシ（Y）と申聖浩（S）との交友濃密に描かれる一方、語り手自身の家族の出来事

や初恋の記憶、作品の舞台となった「漁港のある町」Kのさまざまな情景が描き込まれることで、語り手の成長に2人の朝鮮人との関係が不可分のものとして位置づけられるのである。

以上のように、磯貝は本稿で言及した4作品を書き、「朝鮮体験」を生き直すことで自身の作家としての表現の基盤を更新したのではないかと考えられる⁽³⁾。

注

(1) 本稿で磯貝の文学活動の時期を初期(1950年代末から70年代中盤)、中期(1970年代末から90年代)としたのは、あくまでも便宜的なものである。「読む会」創設の前後で磯貝の文学活動のあり方が大きく変わることを重視すれば、「前期」「後期」の区分であってもよかったかもしれない。しかし、現在もまだ新しい作品を生み出し続けている作家に「後期」という言葉を使うのは失礼であると判断したからである。

(2) YとS以外に、高校生のころ「幼い武闘派」であった磯貝が出会った在日朝鮮人との交友は、「羽山先生と仲間たち」『架橋』9(1989)、「羽山先生が哭く」『架橋』10(1990)、「羽山先生が怒る」『架橋』11(1991)、「羽山先生が笑う」『架橋』13(1993)で作品化されている(後に『在日純情疾風伝』風琳堂・1996に所収)。

(3) 磯貝の初期作品にはかなり早い時期から朝鮮人が登場する。例えば、「かくて驃馬ら天に昇る」『北斗』61(1960)に登場する洪は、朝鮮戦争後、日本に密航してきた青年であり、「火と灰の対話」『北斗』71(1961)に登場する雪乃も北朝鮮から来た女子留学生であり、二人ともいわゆる在日朝鮮人ではない(詳しくは、拙稿2010:158-162)。また、「文字のない標札」『東海文学』53(1974)には語り手の大学時代の山本ゼミの同級生として洪元男が登場し、「遁走のすえ」『東海文学』58(1975)に中学の同級生としてKが登場するが、どちらも周辺的な人物である。磯貝の初期作品については、拙稿(2012:1-5)が簡単に紹介している。なお、ホームページ「ジローの文学マダニ」(<http://www.isojiro-yomukai.com/>)で一部の作品を読むことができる。

参考文献

磯貝治良(1990)「わたしの創作入門」『斜拗』第7号(下記、「在日朝鮮人作家を

読む会」ブログから引用)

磯貝治良 (2004) 『〈在日〉文学論』新幹社

磯貝治良 (2010) 「文学ときどき人生——文学の旅・素描」『架橋』第29号、在日朝鮮人作家を読む会、59-95頁

浮葉正親 (2010) 「〈在日〉文学との出会い——磯貝治良の〈在日〉文学論とその文学」『韓日語文論集』第14輯、韓日日語日文学会、韓国、145-168頁

浮葉正親 (2012) 「磯貝治良の初期作品について」浮葉正親『社会参加としての在日朝鮮人文学——磯貝治良とその文学サークルの活動を通して』名古屋大学、1-5頁

参考 URL

「在日朝鮮人作家を読む会」ブログ <http://yomukai.blog11.fc2.com/>

「ジローの文学マダン」 <http://www.isojiro-yomukai.com/>

(うきば まさちか・教授)